

「奉教人の死」と「おぎん」

—芥川切支丹物に関する一考察—

佐藤泰正

「奉教人の死」(大7・8)については、芥川の数ある切支丹物の中でも、その代表作として屢々論ぜられているが、その作品論として最も卓抜なるものは、三好行雄氏の論攷——「芸術と人生——」
「奉教人の死」芥川龍之介(「作品論の試み」所収)一篇である。氏の論の卓抜さは、これを単に切支丹物の一篇として論ずるのではなく、作者の芸術観、文学観の証言として、その確乎たる芸術観の作品による呈示、言わば一箇の画然たる「マニフェスト」として、この作を位置づけた処にあると言つてよからう。

長崎の「さんた・るちや」という寺院の前に行き倒れていた「ろおれんぞ」という少年があり、寺中に養われて育つが、ひとりの娘を懐妊させた罪によって追放される。その後大火の折、娘の生んだ幼児を猛火の中から救い出し犠牲となつて死ぬが、娘の告白によつて無実の罪は晴れ、しかも「ろおれんぞ」は女であつたことがわかる。作者(語り手)はこの物語を書き終えた後その末尾に、次のような感慨を付している。

「奉教人の死」と「おぎん」——芥川切支丹物に関する一考察——

「その女の一生は、この外に何一つ、知られなだけに聞き及んだ。なれどそれが、何事でござらうぞ。なべて人の世の尊さは、何ものにも換へ難い、刹那の感動に極るものぢや。暗夜の海にも譬へようず煩惱心の空に一波をあげて、未出ぬ月の光を水沫の中に捕へてこそ、生きて甲斐ある命とも申さうず。されば「ろおれんぞ」が最期を知るものは、「ろおれんぞ」の一生を知るものはござるまいか。」

これは芥川が屢々作品の末尾に加える縁どりめいた、さかしげな感慨とも受けとれようが、これを「蛇足」(安田保雄)とみる如き見解をつよく駁して、蛇足どころか、この一節こそは、「いわば小説のかなめとして、作者のモチーフが生きてはたらく、場所であつたはずだ」という。そのモチーフとは何か。

「彼女が生涯の最期に演じた殉教の一瞬に、彼女の真の人生はいきいきと象嵌されるのであつて、その余のさまざまな起伏、波瀾はすべて人生の残滓にすぎない。作者がここで語るのは、人生に対する決然たる姿勢であつた。わたしは、さきにこう書いておいた。その人生に対する態度は、かくして芸術への態度にはかな

らぬ。構成上の破綻をあえておかした二行の意図は——ひとがろおれんぞの一生を索引としてろおれんぞの最期を理解する必要がないように——芸術がその創造と理解のために、芸術家の生活を索引とすることを拒否する、昂然たるマニフェストであった。」

三好氏の論はここで終るが、この終末の一節に至って我々は、芥川自身の「芸術と実生活をめぐる固有の信条を」あかした作を論じたこの一篇の論放が、同時に論者自身の、芸術と生活をめぐる「固有の信条」のあかしであつたことに気づく。構成、文体、原話との比較、その他すべての側面がこの結語に収斂されてゆく——その水も洩らさぬ緻密な論証は、ここに例示する余裕はないが、作品論の範型とも目するに足りよう。

しかし、この評者がさらに一步作品の内実に踏み込んで、「『奉教人の死』」にえがかれたのはキリスト教信仰への宗教的感動でもなければ、迫害に耐えた殉教者の讃美でもない。ここには宗教的感情の断片さえ窺見できない」（傍点筆者、以下全）と断ずる時、果してそうかと、反問せざるをえない。「死後の奇蹟を語る原拠の終章が、小説化にあたってまったく切りおとされたのを見ても、それは明白であらう」と記されているが、しかし、宗教的感情（あるいは感動）とは、単に殉教の讃美や栄光化につながるものではあるまい。この物語はただ、「人生の充実した瞬間を生きた幸福な人間と、その幸福な人間に対するおのれの感動とを」描かんとしたものにすぎぬであらうか。果してこの作は、「宗教的感情」（あるいは感動）の問題を一切抜きにして論じうるものであらうか。この問い

に答える前に、我々はキリスト者によって論じられた、いまひとつの論放にふれて置く必要がある。

笹淵友一氏の最近の論作に、「『奉教人の死』と『じゆりあの吉助』——芥川龍之介の本朝聖人伝——」（『ソフィア』第十七卷三号）と題した一篇がある。氏は標題の二作を、ともに殉教者を扱った本朝聖人伝として取り上げて居られる。これはその比較文学的考察に於て、多くの示唆にとんだすぐれた論述である。しかしここでもまた、「奉教人の死」における宗教性に対しては、きびしい否定的評価がなされている。

たとえば先の末尾の一節にふれて——「『ろおれんぞの最後を知るものはろおれんぞの一生を知るもの』といえるほどの豊かさを、彼女の死の刹那の感動が果してもつていかどうか疑問である」とし、それはろおれんぞの半生が描かれていないことではなく、ろおれんぞの「人間像」、その「人間解釈そのものの」「曖昧さ」に問題があるという。

原話となつた「聖人伝」（明治二十七年刊、斯定筆著）——笹淵氏は、原話としてはこの書の影響を最も重く見ておられる——によれば、罪の汚名を着せられたマリナは、「院長の糾問に対して『少しも返答なく只心に神に禱り猶一層の苦みを我身に与へ給へ』と願つた。即ち彼女はその冤罪を神の思籠の試練とも受取つた」。これに対してろおれんぞは「身の潔白を主張」し、「しめおんに対しては『娘は私に心を寄せましたげでござれど、私は文を貰うばかり、口を利いた事もござらぬ』という事のいきさつまで明らかにして、

身に降りかかる火の粉を払おうとした。即ちろおれんぞにとつては、それは要するに不条理な災難であり、信仰とは没交渉の問題であつた。——ここに「『聖マリン伝』からの変質がある」という。しかも、このろおれんぞの人間像の曖昧さは、「結局キリスト教とキリスト者に対する理解の浅さに原因」するものであり、「このような理解の限界が、宗教的感動の芸術化という、おそらく芥川が最初に抱いていた命題からむしろ宗教的感動から芸術的感動への変質という方向に『奉教人の死』を傾斜させた原因であつた」という。

しかし作者は果して、罪の汚名を受けたろおれんぞが、これを「信仰とは没交渉の問題」として受けとめた如くに、描いたであらうか。冤罪の苦しみの極まる処——ついに彼は寺院を放逐される。この時、彼を愛した兄弟子のしめおんは、「欺かれたと云ふ腹立たしさ」の余りに拳をふるつて、したたかにろおれんぞの顔を打つ。打ち倒されたろおれんぞは「やがて起きあがると、涙ぐんだ眼で、空を仰ぎながら、『御主も許させ給へ。』「しめおん」は、己が仕事をわきまへぬものでござる」と、わななく声で祈つた」という。この祈りが、十字架上のキリストの——「父よ、彼らを赦し給へ、その為す所を知らざればなり」（ルカによる福音書二十三章三十四節）になつたものであることは明らかであらう。またしめおんへの赦しの願いが自分を放逐した同門の信徒のみならず、自分に罪をかぶせた憎むべき女へのそれでもあることは、言うまでもあるまい。

「奉教人の死」と「おぎん」——芥川切支丹物に関する一考察——

「その時居合はせた奉教人衆の話を伝へ聞けば、時しも凜にゆるぐ日輪が、うなだれて歩む『ろおれんぞ』の頭のかなた、長崎の西の空に沈まうず景色であつたに由つて、あの少年のやさしい姿は、とんと一天の火焰の中に、立ちきはまつたやうに見えたと申す。」この描写が終末の火災の場面にあい照応する如く、このろおれんぞの祈りは、憎むべき女の産み落とした幼児を救わんがため、ついに殉教の死をとげる終末の場面への周到な伏線であることは疑いあるまい。

笹淵氏は、この作の決定的な弱点として、「傘張の娘から負わされた無実の罪を、聖マリナのように、神の試練として受取ろうとなかつたろおれんぞの態度と生命を賭けて猛火の中から娘の子を救い出した殉教的行為との間のギャップが作者の敘述によつても埋められていないこと」を指摘して居られるが、尠くともこのろおれんぞの祈りが、兩者をつなぐ重要な伏線となつて居ることが見逃されてはいないか。さらに氏はこの作における「宗教的感動から芸術的感動への変質」にふれ、その例証として末尾の周知の一節を引用されている。

「見られい。『しめおん』。見られい。傘張の翁。御主』ぜすきりしと」の御血潮よりも赤い、火の光を一身に浴びて、声もなく『さんた・るちや』の門に横はつた、いみじくも美しい少年の胸には、焦げ破れた衣のみまから、清らかな二つの乳房が、玉のやうに露れて居るではないか。今は焼けただれた面輪にも、自らなやさしさは、隠れようすべもあるまじい。おう、『ろおれんぞ』は女ぢや。『ろおれんぞ』は女ぢや。見られい。猛火を後に

て、垣のやうに佇んでゐる奉教人衆、邪淫の戒を破つたに由つて、「さんた・るちや」を逐はれた「ろおれんぞ」は傘張の娘と同じ、眼なごしのあでやかなこの国の女ぢや。」

ここに見るものは、「大火」という異常な、シヨッキングな事件とその中におけるろおれんぞの殉教死、そしてろおれんぞが女であつたことの確認という、相つぐ人の意表に出た事件の視覚的描写によつて「もたらされた「芸術的感動」にすぎぬ。よしそれが「ろおれんぞの殉教と没交渉ではない」としても、この「最高潮の感動の場面が、ろおれんぞの内面の問題よりも、猛火に照らし出された女性としての肉体の確認にある」というまでもない。ここにはまがうべくもなく、「刹那の芸術的感動——その感動の中核は感覺的刺激である」——に身を託する芥川の「審美」的性格があらわに呈示されている。笹淵氏の論は、ほぼこのように要約出来よう。またさらに付記すれば、この場面が「『眼に見えるやうな文章』が好きだといふ芥川の個性を十二分に發揮した文章であり、それは屢々いわれるやうに「地獄変」の猛火——火に包まれた檳榔毛の車の中の良秀の娘のあてやかな姿——と共通の感覺をもっている」ことを指摘しつつ、同時に、「『地獄変』が単に異常な感覺的刺激に、止まつたのに較べれば、さきの一節は内面性をもつて、いはずであるが、しかしそれも殆ど感覺的なものに覆われている」と指摘されている。

果してこの作は笹淵氏が繰返し指摘される如く、ろおれんぞの「内面の問題よりも」その「女性としての肉体の確認」という風に、本来この作品の素材からして「もっているはず」の「内面性」が作者の「審美主義」やキリスト教に対する「理解の浅さ」のた

め、「殆ど感覺的なものに覆われて」しまつたというてい、いのものであろうか。

恐らくここには、作家が宗教的主題に立向う時、まぬがれざるをえぬ、極めて困難な課題が含まれている筈である。その課題とは——小説家は、いかにして「聖者」を描きうるかという課題である。笹淵氏の批判にも拘らず、この作の「聖マリン伝からの変質」は、作家たるもの強いられた必然である。芥川が描こうとしたのは、いかなる「聖人伝」でもなく、一箇の純乎たる文学作品にはかならない。冤罪に直面したろおれんぞの悶えと余りにもめめしいふるまいを、聖マリナの所行と比較して非難することは、一箇の文学作品を「聖人伝」——即ち「聖者」の「伝記」という次元に引きもどすことではないのか。

「……『しめおん』は猶も押し問ひ詰つたに、『ろおれんぞ』はわびしげな眼で、ぢつと相手を見つめたと思へば、『私はお主にさへ、嘘をつきさうな人間に見えるさうな』と咎めるやうに云ひ放つて、とんと燕つばくちが何ぞのやうに、その儘つと部屋を出て行つてしまつた。かう云はれて見れば、『しめおん』も己おれの疑深かつたのが恥しうもなつたに由つて、悄悄その場を去らうとしたに、いきなり駆けこんで来たは、少年の『ろおれんぞ』ぢや。それが飛びつくやうに『しめおん』の頸うなじを抱くと、喘ぐやうに『私が悪かつた。許して下さい』と囁いて、こなたが一言も答へぬ間に、涙に濡れた顔を隠さう為か、相手をつきのけるやうに身を開いて、一散に又来た方へ、走つて往んでしまつたと申す。」

たしかに、しめおんの疑いに対するろおれんぞの悶えは、一種纏

綿たる筆致を以て描かれ、読み終つてろおれんぞが女性であったことを知る時、この場面は二重の肉感性をもつて読者の脳裡によみがえる。この場面の官能的な描写もまた、末尾のろおれんぞが実は女性であったことへの、伏線ともみるべき工夫であろう。

もとより、この作が——「女が男だと思はれてゐる話。Saint Maria」という手帳のメモにもみる如く、筋立ての意外性という芥川好みの趣向を軸としていることは明らかだが、しかしこの作の主旨が、「ろおれんぞの内面の問題よりも猛火に照らし出された女性としての肉体の確認」という感覚的描写にあったとは、やはり断じえない。

みづからの芸術観を呈示するために、原話の前半を切り棄てるといふ、構成上の破綻をも敢て冒した——そこに芥川の独創があつたとは、三好氏の指摘される処であるが、しかし同時に、この殉教をテーマとする作品の内実にふれてこれを言うならば、作家は「聖者」を描きうるか、否、「聖者」の生涯は描きえずとも、なお一片の無償の愛（アガペエ）の行為を、主題として描きうるかといふアポリアに直面して試みた、その手法にこそ芥川の独創があつたといえよう。その手法とは、アガペエを描くに、エロスを以て包むといふことである。

ろおれんぞの死がその伏線となる祈りの部分にみる如く、己を陥れた憎むべき敵のためにも、みづからの命を与えんとする無償の愛につながるものであることは、すでにふれた。作者はいま、この無償の愛（アガペエ）を描くに、猛火に照らし出された女性のあでやかな裸身という、最もエロスのな場面をからませて呈示した。ここに

「奉教人の死」と「おぎん」——芥川切支丹物に関する一考察——

作者のかけがえのない独創があつたと言ひうるであろう。たとえば現代のキリスト教作家が語る——我々が「結局ぶつかるのは、宗教の求めている純粋というか、清らかさというものを芸術が汚すといふこと」だ。「汚さなかつたら芸術といふものは成立しない。

——手を汚さざるをえないところで成立する」（遠藤周作）といふ矛盾もまた、この間の機微にふれるものであろう。（遠藤氏の代表作「沈黙」におけるあのロドリゴの踏絵の場面が、神の絶対なる愛（アガペエ）のあかしであるにも拘らず、殆どエロスの言つてよいほどの、肉感的な感動を孕んでいることも、またこれらと無縁ではあるまい。（拙稿「遠藤周作——「沈黙」を視座として」——「国文学」四十四年二月号参照）

もはや明らかであろう——ろおれんぞの「内面の問題」と「猛火に照らし出された女性としての肉体の確認」とは、二元的に對置されるものではなく、両者はまさに不可分のものであり、その「内面性」は「感覚的なものに覆われている」のではなく、まさにその「感覚的な」描写の只中に、作の主旨——無償の愛をうたうといふ「内面性」は、生きえたと言うべきであろう。（勿論これらの根底に、たとえば「芸術に奉仕する以上、僕等の作品の与へるものは、何よりもまづ芸術的感激でなければならぬ」「作品の内容とは、必然的に形式と一つになつた内容だ」（「芸術その他」大8・11）といふ如き、芥川の確乎たる芸術観のあることは、言うまでもない。）さて、上来「奉教人の死」における宗教性と芸術性の問題をめぐつて、いささかのアポロジを試みて来たかにみえるが、しかしこれは、この作品がこの困難な課題に十分に成功しえたことを、必ず

しも意味してはいない。この作は先に指摘した作者の意図と工夫にも拘らず、なお十全の成果を挙げえたものとは言いがたい。そのあざやかな文体の工夫、語り口、効果的な劇的展開、終末の高潮部——これら手法上のさまざまな試み、またさらに言えばその内実在於て——「人間がいまだあらぬところの『何も』」かに向つて、今ある現実を超えて、一向に帰依し、没入しようという、人間の炎のごとき、ゾルレン的な生き方（生の様式）、純粹な精神世界への直線的な姿勢（つまり、狂信的とも、病的ともいえるような）に対する驚嘆と感動」によつてつらぬかれた——「炎のごときゾルレンへの殉教者の姿を鮮明」（伊藤四士良「奉教人の死」に關するノオト）——駒尺喜美編「芥川龍之介作品研究」所収）に歌い上げたものであつたとしても、いや、まさに彼の實質に発するこのような側面を持つが故に——なお言いがたく深い矛盾に包まれた人間存在そのものの重さと機微に対する深い洞察と把握、そこからおのずから押し出され、滲み出て来る——あの小説本来の持つ、たしかなさと手応えをここに需めることは出来ない。これはまさしく先の評家の言う如く、「近代散文藝術の論理性」を以ては律しえぬ一箇の詩的作品であり、みずからの生の「堅固なゾルレンに殉じた『永遠に超えんとするもの』たち」への一篇の頌歌の、その極点に立つものと言えよう。

芥川がここに、切支丹殉教にかかわる一篇の頌歌を「炎のごときゾルレンへの殉教者」を描ききつたとするならば、彼はその代償として彼が切り棄て、とりこぼさざるをえなかつたもの、即ちその対極的世界を——「炎のごときゾルレン」に対しては、淵の如く冥く深

いザインの根ざしの、その深い根源の矛盾の様態を、「永遠に超えんとするもの」に対しては「永遠に守らんとするもの」を、殉教に對しては背教（あるいは棄教）を、アガペエに對しては肉の情念にまつわるフィレンを、——彼が敢てその背部に取り残さざるをえなかつたこれら反極の世界を、描かざるをえない筈である。「おぎん」（大11・8）一篇は、まさしくこの役割をになつた作と見ることが出来る。

二

芥川の切支丹物と言へば、「奉教人の死」や「神々の微笑」（大10・12）を代表作とするのが通例であるが、私はむしろ「おぎん」をこの系列中の第一等の作、尠くとも彼の最も重い主題をになつた、注目すべき作と見る。

元和か寛永の頃、浦上における切支丹処刑の犠牲者として、おぎんは養親の孫七、おすみ夫婦と共に捕えられ、火炙りの刑に処せられようとする。しかし処刑直前となつて、おぎんは教を棄てるといふ。おまえには悪魔がついたのかと驚く親たちの前に跪つきながら、おぎんは言う——

「わたしはおん教を捨てました。その訳はふと向うに見える、天蓋のやうな松の梢に、氣のついたせむでございます。あの墓原の松のかげに、眠つていらつしやる御両親は、天主のおん教も御存知なし、きつと今頃はいんへるのに、お墮ちになつていらつしやいませう。それを今わたし一人、はらいその門にはひつたのでは、

どうしても申し訳がありません。わたしはやはり地獄の底へ、御両親の跡を追つて参りませう。どうかお父様やお母様は、せすす様やまりや様の御側へお出でなすつて下さいまし。その代りおん教を捨てた上は、わたしも生きては居られません。……」

おぎんの言葉に涙を流す妻をふりかえり、「お前も悪魔に見入られたか？ 天主のおん教を捨てなければ、勝手にお前だけ捨てるが好い。おれは一人でも焼け死んでみせるぞ」という孫七に向つて、おすみは「いえ、わたしもお供を致します。けれどもそれは——それは——」——彼女は涙をのみこみながら「半ば叫ぶやうに」言う——

「『けれどもそれははらいそへ参りたいからではございません。唯あなたの、——あなたのお供を致すのでございます。』」

孫七は長い間黙つてゐた。しかしその顔は蒼ざめたり、又血の色を漲らせたりした。と同時に汗の玉も、つぶつぶ顔にたまり出した。孫七は今心の眼に、彼の靈魂アニマを見てゐるのである。彼の靈魂を奪ひ合ふ天使と悪魔とを見てゐるのである。もしその時足もとのおぎんが泣き伏した顔を挙げずにゐたら、——いや、もうおぎんは顔を挙げた。しかも涙に溢れた眼には、不思議な光を宿しながら、ちつと彼を見守つてゐる。この眼の奥に閃いてゐるのは、無邪気な童女の心ばかりではない。「流人るにんとなれるえわの子供」、あらゆる人間の心である。

「お父様ノいんへるのへ参りませう。お母様も、わたしも、あちらのお父様やお母様も、——みんな悪魔にさらはれませう。」
孫七はとうとう墮落した。」

「奉教人の死」と「おぎん」——芥川切支丹物に関する一考察——

これは作品の終末部、三人の棄教をめぐる最も感動的な箇所だが、ここで作者は殉教と棄教、さらには宗教の土俗化の問題をめぐつて、最も重く深い問いを投げかけているかにみえる。この作に対する解釈のひとつに、たとえここに描かれたものは——「美しくみえる彼らの信仰というものも、結局うらをかえせばエゴイズムからでているのではないか、殉教という純粹にみえる行為も、その底にはやはり己れひとり天国へ行けばよいというエゴイズムがひそんでいのではないか、という自問自答なのだ」（駒尺喜美）だという見方もあるが、果してそうであろうか。（駒尺氏のすぐれた芥川理解の多くの部分に推服し、共感を抱いて来たものだが、「おぎん」の解釈、さらには切支丹物の解釈のいくつかについては、なおいくばくかの反問を抱かざるをえない。）むしろここにあるものは、アガペエとエゴイズムの対立ではなく、アガペエとフィレインの葛藤とこそ見るべきではあるまいか。

「奉教人の死」のなかで、ろおれんぞの殉教をめぐり、「御主」ぜすきりしと」の再来「御主」ぜすきりしと」の御行跡を踏んで「御主」ぜすきりしと」とひとしく奉らうぜ志——さらには先の引用部分の「御主」ぜすきりしと」の御血潮よりも赤い、火の光を一身に浴びて「云々など——繰返し、ろおれんぞの所業がキリストの無償の愛（アガペエ）をまねぶものであることを記し、「これが「まるちり」（殉教）でなうて、何でござらう」と語り手をして言わしめていることは、やはり留意しておく必要がある。ここで殉教の内実とは何かが問われていることは、明らかであろう。いま再び、「おぎん」のなかで作者は別の側面から殉教の問題を

問おうとする。フレイレン——この肉につながる深い恋愛の情を断ち切らずしては、また異端の宗教に殉じた死者を（また生者をも）切り棄てずしては成就されぬものならば、この信仰とは、殉教とは何か。あの「墓原の松のかげ」に眠り、「いんへるの」に墮ちたと信ぜられる両親を捨ててゆくことは出来ぬというおぎんの告白は、この避けがたく重い問いを我々に突きつける。またさらに、孫七の固守せんとする殉教の栄光は、ただ「あなたのお供を致すのでございます」という、おすみの言葉によって見事に砕かれる。こうして最後に孫七を見上げるおぎんの眼が、もはや無邪気な「童女」の眼ならぬ、「流人となれるえわ（イブ）の子供」、あらゆる人間の心」の閃きに、不思議な光を帯び、「いんへるのへ参りませう。……みんな悪魔にさらはれませう」と叫ぶ時、この問いは極まるかにみえる。

これは別稿（「宗教とその土俗化——「沈黙」と「鬼無鬼島」をめぐって」——「解釈と鑑賞」四十四年十一月号）でもふれたが、たとえばここで先にふれた「沈黙」におけるロドリゴの背教の場面が想い出されると言えば、果して奇矯にすぎようか。おぎんの眼の不思議な愛貌に、聖なる「童女」ならぬキリストの顔が、司祭ロドリゴの足下に、やがてかなしげな日本の土俗の母親の顔となり、「踏むがいい」とよびかける——あの場面との、ある言いがたく深い照応を私は感ぜざるをえない。おぎんの眼にやどる不思議な光は、「踏むがいい」とよびかけるキリストの眼差につながるものではないのか。孫七をして棄教せしめたそのものは、またロドリゴをころばしめたそれと、無縁ではあるまい。

殉教か棄教か——まぬがれえざる最後の事態に面して苦惱するロドリゴに向って、彼の師フレイラは呼びかける。お前が転べば信徒たちは救われる。それをなしないのは、「お前は彼等のために教会を裏切ることが怖ろしいからだ。このわしのように教会の汚点となるのが怖ろしいからだ」。しかし「それが愛の行為か」。「司祭は基督にならって生きよと言う、もし基督がここにいられたら」——「たしかに基督は、彼等のために、転んだだろう」。この一見冒瀆ともみえる言葉に託して、作者の問わんとする処はずでに明らかであろう。

「お父様！いんへるのへ参りませう。お母様も、わたしも、あなたのお父様やお母様も。——みんな悪魔にさらはれませう。」——おぎんをして呼びしめるこの冒瀆の言葉に芥川の託したのも、また「沈黙」の主題と無縁ではあるまい。「沈黙」のモチーフが、人間の弱さの故にころび、カトリック教史の汚点として歴史の底に沈黙せしめられている、その沈黙のなから彼らを呼びおこすこと、転んだが故に教団の歴史から抹殺され、切り棄てられてしまった、その名もなき者の復権にあつたとは、作者自身の語る処であり、この教団の孕むリゴリズム、律法主義への、避けがたく深いプロテストとして遠藤氏はこれを描いているが、芥川の問いもまたこれに重なる。ただ彼は棄教者のみならず、異端者の救いという根源的な問いをもからめて呈示する。「おぎん」というこの一短篇の含む課題は深く、重い。

芥川という人は「いろんなものを残してくれたんだ」「一番さいしょの石をパチンと置いて去って行ったような気がする」とは、

「神々の微笑」にふれての遠藤氏の言葉だが、文学と宗教をめぐる芥川の先駆的な意味は、通常挙げられる「神々の微笑」よりも、「おぎん」の如き作品に於てこそ注目されるべきであろう。「文学と宗教」とは、我々に遺された永遠の課題である。宗教的モチーフの文学的肉化をめぐる、芥川が試みんとし（「奉教人の死」）、また問わんとした処は（「おぎん」）、そのまま今日につながる深い課題であろう。芥川の切支丹物の内実たる宗教性に対する従来の過小評価に対して、ここにいささかの反論を試みたが、もとよりこの評価は芥川の生涯をつらぬく全文脈に於て、検討されるべきものであろう。これらについて例示し、論証する紙幅はもはやないが、これはまた他日を期して仔細に論じてみたいと思う。

（付記—上記の問題については、別に「芥川とキリスト教（仮題）」と題する拙稿（「国語と国文学」四十五年二月号掲載予定）を用意しているので、参照して戴ければ幸いである。）